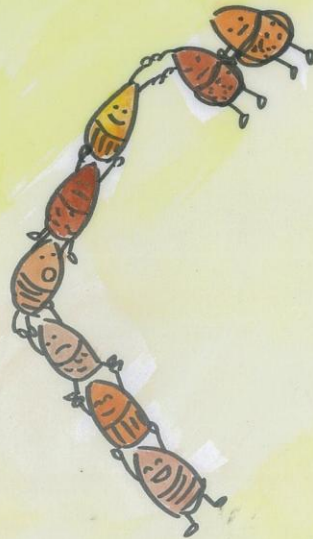
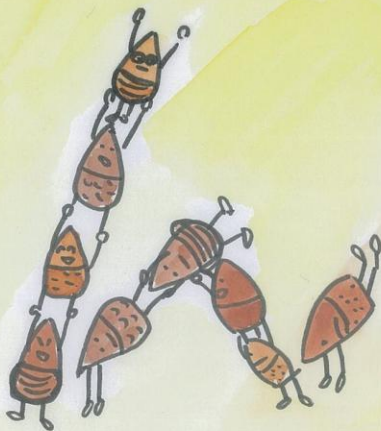






秋の日差しがきらきら輝くある日、山のふもとでドングリたちが騒いでいました。「なんたって、ぼくのパンツはボリュームがあって風格があるね」とクヌギのドングリが言いました。

「うん、でもねー」とシラカシのドングリが言いました。「僕のもしましながあっておしゃれだろー。」「あーら、私のポツポツ模様もすてきよ。」とコナラのドングリがいうと、「「いーや、僕のはすっぽりかぶって個性的だよ。」とスダジイのドングリが言いました。みんな、どのドングリも自分が一番かっこいいと思っているので僕たちのが、私のがとにぎやかです。



ウトウト居眠りをしていた大きな榎の木が「むふん！」と咳払いして眠そうに言いました。

「ドングリたち、静かにしておくれ。これじゃー、ウトウト昼寝もできないよ。」ドングリたちは一斉に上を見上げて言いました。

「おじいさん、じゃーお話してよ。」

「よし、わかった。その代り話が終わったら静かにするんだよ。」

そして、大きな榎の木はお話を始めました。



お前たちのお父さんがまだドングリだったころだ。

この山のふもとに竜太という男の子が母ちゃんと暮らしておった。

ある日、竜太が家に帰ると、母ちゃんが寝ておった。

「母ちゃん、具合が悪いの？」

「大丈夫、すぐ良くなるよ。」

でも母ちゃんはなかなか良くならなかった



竜太はだんだん心配になり、村の道祖神の所で、一生懸命お祈りをした。

「神様、母ちゃんを元気にしてください。おれは何でもします。お手伝いもいっぱいします。勉強もしっかりします。これからは母ちゃんの言う事を聞いて、心配もかけません。」とな。
向こうの山道から、村のばあさまがやってきた。



竜太の話を聞いて、ばあさまが言った。
「心配じゃなあー。昔、具合の悪い人が山の神の水を飲んで治ったことがあると聞いたことがある。」

「どこにあるの？」
「山の奥の三角石のふもとから湧き出ていると聞いたことがあるが、今もあるかどうか。昔は毎年若い衆が祈りをささげにいったおったがのう。」



竜太は山に出かけた。
ちょうど、さっきのお前たちのように父さんたちが騒いでおった。竜太は夢中で走り、お前たちドングリに滑ってころんだ。膝から血が出たが、起き上がっては走り、又転び、走って行った。「どうしたの？どうしたの？」ドングリたちはびっくりして大きな榎の木を見上げた。「病気の母ちゃんのため、山の水を汲みに行くんだ。」ドングリたちは口々に騒いだ。「おじいさん、あの子を助けてあげて！」「暗くなるよ。間に合わないよ。三角石は見つからないよ。」



その時、ざわざわと木々の枝が揺れ、ひゅーっと冷たい風が通り過ぎた。すると、竜太の前のドングリたちが一列にキラキラ、キラキラと輝きだした。竜太はどこまでもどんぐりの輝く方を走り続けた。



その頃、村では竜太がいないので、心配した村人が集まっていた。村のばあさまから聞いて、山に行ったに違いないと、村の若い衆がたいまつを持って山に登ろうとしていた。そこへ竜太が山みちからおりてきたのだ。



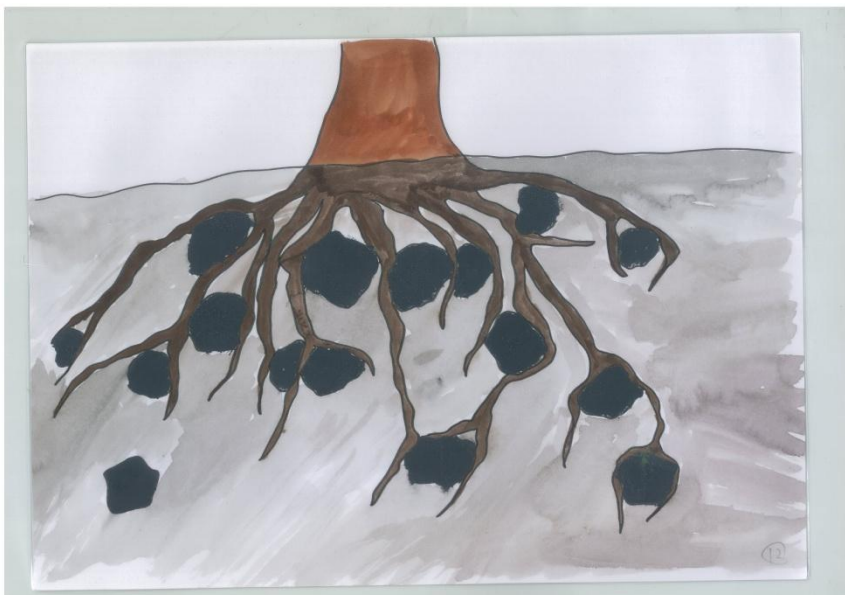
その姿を見てみんな驚いた。龍太の手に水があるのを見て、ばあさまが言った。「ありがたい。ありがたい。山の神のお助けだ。竜太、母ちゃんに早く水をあげておいで。ああ、ありがたいありがたい。」



ばあさまは言った。「山はなあ、木を育て
きれいな空気をつくる。」



木は落ち葉を落とし、土の中の小さな生
き物やキノコたちがそれを豊かな土にし
る。



木の根は石をつかみ、土を固める。



山に降った雨は何日も何年もかかって、豊かな土や石や木の根の間を通り、きれいでおいしい水を作る。雨が降らなくても川の水がなくなることはないのは、山が水をため、絶えずながしてくれるからだ。すべての生き物は山の木々の恵み、土の恵み、きれいな水に生かされていた。それだから人々は山に感謝し、祈った。



待ちきれなくてスダジイのドングリが聞きました。

「竜太の母ちゃんは助かったの？」

「もちろん、山の神が助けてくれたのだ。龍太はそれから大切な水を汲み続けた。母ちゃんはすっかり元気になったよ。それになあ・・・」

だけどドングリたちはもう聞いていませんでした。早く家に帰って、自分たちの母ちゃんに会いたくなったのです。「おじいさん、さようなら。」というところころ転がりながら帰ってしまいました。



そして、山は静かになりました。

大きなタブの木のうろの中でふくろうが「うっふっふ」と笑いました。

檜の木がまだ話したかったのに、聞く人がいなくなってしまったのです。

「あの子たちは本当にわかってるのかしらん。大事なことが。山の水はいろんな生き物の命の水だ。山は長い年月をかけて作られた生き物たちの生きてきたあかしじゃー。誰も一人では生きられない。みんなつながって、支えあっているのだよ。ほら、今も山にはひゅーひゅーと風が吹いているだろう？もう生きている時には何の生き物だったかさえ忘れてしまったたくさんの生き物の魂が、ひゅーひゅーと飛んでいるだろう？・・・ほら、ほら聞こえるだろう・・・。ぶつぶつと小さい声で言いながら檜の木は寝てしまいました。

おしまい。